

【原 著】

全学教職課程における「教職実践演習への取組」(3)
—平成 25 年度受講生アンケート結果による検討—

三島 知剛 檜田 健志 高旗 浩志 稲田 修一 後藤 大輔 江木 英二
曾田 佳代子 山根 文男 加賀 勝 高塚 成信

Practical Seminar for Teacher Profession on the Teacher Training Program at Okayama University (3)
Based on the Questionnaire Survey to Participants of the Practical Seminar for Teacher Profession
in 2013

Tomotaka MISHIMA, Tsuyoshi KASHIDA, Hiroshi TAKAHATA, Shuuichi INADA,
Daisuke GOTO, Eiji EGI, Kayoko SODA, Fumio YAMANE, Masaru KAGA,
Shigenobu TAKATSUKA

2015

岡山大学教師教育開発センター紀要 第5号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.5, March 2015

原 著

全学教職課程における「教職実践演習への取組」(3)

—平成25年度受講生アンケート結果による検討—

三島 知剛^{*1} 榎田 健志^{*2} 高旗 浩志^{*1} 稲田 修一^{*1} 後藤 大輔^{*1} 江木 英二^{*1}
 曾田 佳代子^{*1} 山根 文男^{*1} 加賀 勝^{*1*3} 高塚 成信^{*1*3}

岡山大学では、教師教育開発センターによる全学の教員養成教育の質保証に取り組んでいる。本研究では、平成25年度に本格実施された全学教職実践演習に着目し、その成果と課題を検討する。なお、本学の全学教職実践演習は「オリエンテーション」「学習指導力に係る省察」「模擬授業演習」「現代的教育課題に係る省察」「まとめ」の5つから構成され、本学の重要視する4つの力（「学習指導力」「生徒指導力」「コーディネート力」「マネジメント力」）をバランスよく育むことを企図している。そして、本格実施された教職実践演習について、学生に実施したアンケート調査結果を分析対象とし、成果と課題を検討した。その結果、学生の多くが教職実践演習の効果を比較的高く認知していることや、教育実践力を構成する4つの力の多くの力が教職実践演習を通して高まっていること、などの成果が主に示唆された。

キーワード：全学教職実践演習, 教育実践力を構成する4つの力, 学生の意識

※1 岡山大学教師教育開発センター

※2 倉敷教育センター

※3 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに

本研究の目的は、岡山大学において実施された全学教職実践演習の成果と課題を教職実践演習が本格実施された平成25年度の受講生を対象にしたアンケート調査結果により検討することである。

教職実践演習は、教員免許取得を希望する学生が4年次に履修する必修科目であり、平成25年度より新設された科目である。中央教育審議会(2006)の答申によると、教職実践演習(仮称)は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである、とされている。そして、学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期

待される、とされている。教職実践演習の実施に伴い、各大学では、教職実践演習のカリキュラムの開発や試行が行われ(例えば、姫野・石橋・神居・斎藤, 2011; 佐瀬, 2013), 教育学部以外の学生に対する教職実践演習の試行の報告(田宮・下野, 2008)や下田・豊田(2013)による工学部における教職実践演習の実践報告もなされている。

教育学部以外の学生を対象とした全学教職実践演習の導入にあたり、岡山大学では、全学教職課程履修学生対象の教職実践演習について本格実施前から検討を進めてきた(詳細は、榎田・高旗・江木・曾田・三島・後藤・加賀(2013)及び榎田・高旗・三島・江木・曾田・後藤・佐藤・山根・加賀(2014)を参照)。その中で、検討した授業内容に対して1時間のみの教職実践演習プレ試行を平成23年度に、全15回分の試行を翌平成24年度に実施し、成果と課題の検討を行い、本格実施の平成25年度に備えてきた。本学の全学教職課程履修学生対象の教職実践演習の特徴として大きく4点を挙げることができる。第1に、協同学習の手法に習熟できるという点である。すなわち、グループワークを中心とした授業構成にしてい

るため、学生は授業を受講しながら協同学習の手法に習熟することが期待できるのである。第2に、総合大学の利点が活きるという点である。すなわち、多様な学部メンバーが受講生で交じり合っているということや、いろいろな専門性をもった教員が授業を担当する形にしている。第3に、教職担当教員と教科担当教員の協同による授業実施にしている点である。各講の教室には、基本的に教師教育開発センターの教員からなる教職担当教員1名と各学部の教員からなる教科担当教員1名の2名の担当教員がつき、1回あたりの授業を実施しているのである。多くの教員が授業担当を担う形式にすると、授業の共通理解が図りにくいことも考えられるが、本学では教師教育開発センターと教育学部以外の課程認定を受けている各学部とが共にこの教職実践演習を担う形式をとっているのである。第4に、充実した演習の確保がなされている点である。すなわち、最終講を除き、基本的に2コマ続きとし、一部を除き隔週開講としている。このことによって、予習や復習や1回の授業でのグループワークのための時間を十分確保しやすくしているのである。

本学の全学教職課程履修学生対象の教職実践演習の授業内容は以下の5つに大別できる。1つ目は、第1-2講からなる「オリエンテーション」である。オリエンテーションの大まかな内容としては、この授業全体の説明と講師を招いての講演から構成されている。2つ目は、第3-6講からなる「学習指導力に係る省察」である。ここでは、学生が4年次前期の教育実習で実施した授業の練り直しを行っている。3つ目は、第7-10講からなる「模擬授業演習」である。ここでは、練り直した授業を代表者が模擬授業として実施し、実施後は生徒役の学生も含めたピアレビューを行っている。4つ目は、第11-14講からなる「現代的教育課題に係る省察」である。ここでは、現代的教育課題として2つの事柄に焦点を当て、グループワークを中心に学んでいく。なお、平成25年度は、「保護者対応」「特別支援教育」の2つについて取り扱うこととし、事例を基に協議をしたり、保護者対応の講ではロールプレイを実施したりするなどした。最後、5つ目は第15講からなる「まとめ」であり、この科目のまとめや1年次からの教職課程の学びを振り返ることとしている。

この平成25年度の全学教職実践演習の実際については、檜田他(2014)で報告されており、その中で、学生の出欠の把握や教員同士の次時の授業への引き

継ぎ等、多少とまどう場面も生じたが、大きな混乱もなく授業を実施できたことや、教科教員による教職実践演習評価票への授業への所見が概ね高評価であることが記述されている。しかし、学生に実施したアンケート結果についての分析はなされていない。教職実践演習の成果と課題を検討していく一助として学生に実施したアンケート結果を分析していく必要があると考えられる。そこで、本研究では、学生によるアンケート結果について分析を行うこととした。

II 方法

1 調査対象

調査対象は、平成25年度に全学教職実践演習を受講した学生95名(文学部、法学部、経済学部、理学部、工学部、環境理工学部、農学部、MPコース)であった。また、設問ごとの有効回答数は異なる。

2 調査時期

調査は、平成25年度全学教職実践演習の最終講(2014年1月)内に実施した。また、実践演習前のデータとして用いた調査は、教育実習後の事後指導(2013年7月)において実施した。

3 調査内容¹⁾

(1) 授業内容への満足度

本実践演習の内容に関して充実していた内容に関して以下の選択肢に関して複数回答可で求めた。なお、選択肢は、「ガイダンス・講演」「学習指導力に係る省察」「模擬授業演習」「現代的教育課題に係る省察【保護者対応】」「現代的教育課題に係る省察【特別支援教育】」「まとめ」「どれも物足りない」の7つであった。

(2) 授業全体、実施形態等への満足度

“教育実習後の自己課題の克服”、“授業内容によってグループのメンバーを変えること”、“教職担当教員と教科担当教員が合同で授業を実施すること”についてそれぞれ、「全く有益でなかった」～「大変有益だった」の5件法で回答を求めた。さらに、“教職への理解の深まり度”について「全く深まっていない」～「非常に深まった」の5件法で回答を求めた。

また、“原則隔週2コマ連続で四半期で終わる形態”について「ちょうどよかった」「毎週1コマでもっと長い時間をかけた方がよかった」「その他」から選択させた。

さらに、“卒業研究や就職活動との両立”について

「両立できた」「難しいときがあった」「両立できなかった」、「次時までには課題（宿題）を求めることがあったこと」について「よかった」「しんどかった」「物足りなかった」、から選択させた。

(3) 教育実践力を構成する 4 つの力に対する自己評価

本学教職課程では、「学習指導力」「生徒指導力」「コーディネート力」「マネジメント力」の 4 つの力で構成される教育実践力をバランスよく身につけた教員を育てることを目指している。その 4 つの力には、それぞれ下位項目として 4 つの力がある。すなわち、計 16 項目（項目例：学習指導要領や教育課程をふまえて、学習指導案を作成すること）を用いた。そして、現段階でどの程度身につけていると思うかについて「全く身につけていない」～「充分身につけている」の 5 件法で回答を求めた。

Ⅲ 結果と考察

1 授業内容への満足度について

結果を示したのが図 1 である。図 1 より、「現代的教育課題に係る省察（保護者対応）」「模擬授業演習」「学習指導力に係る省察」「現代的教育課題に係る省察（特別支援教育）」「ガイダンス・講演」「まとめ」の順に回答数が多かった。このうち、「模擬授業演習」に関しては、檜田他（2013）がまとめた、全学教職

課程の教育実習を終えた学生が考える本学の全学教職課程の課題について、「授業指導関係」に関する自由記述のうち、模擬授業の少なさや実践的な授業を求めるものが多かったことから、模擬授業演習に対する学生のニーズが高かったことが考えられる。

また、現代的教育課題の保護者対応に関しては、学生がこれまで学ぶ機会が少なかったことや、実践演習を通してこのテーマの重要性に気づいた可能性が考えられる。また、授業の中で保護者役と教師役、観察者役という役割を持たせてロールプレイを行ったことが学生にとって新鮮だったのかもしれない。

2 授業全体、実施形態等への満足度について

結果を示したのが図 2～6 である。結果を見ると、“原則隔週 2 コマ連続で四半期で終わる形態”について「ちょうどよかった」と回答する学生が多かったことや“授業内容によってグループのメンバーを変えること”“教育実習後の自己課題の克服”に対して「大変有益だった」「有益だった」と回答する学生が多かった。また、“教職への理解の深まり”に関しても「非常に深まった」「深まった」と回答する学生が多かった。これらの結果から、授業形態への満足度及び授業全体への満足度は比較的高かったと考えられる。

一方で、“卒業研究や就職活動との両立”“次時までには課題（宿題）を求めることがあったこと”については、それぞれ“難しいときがあった”“しんどかった”

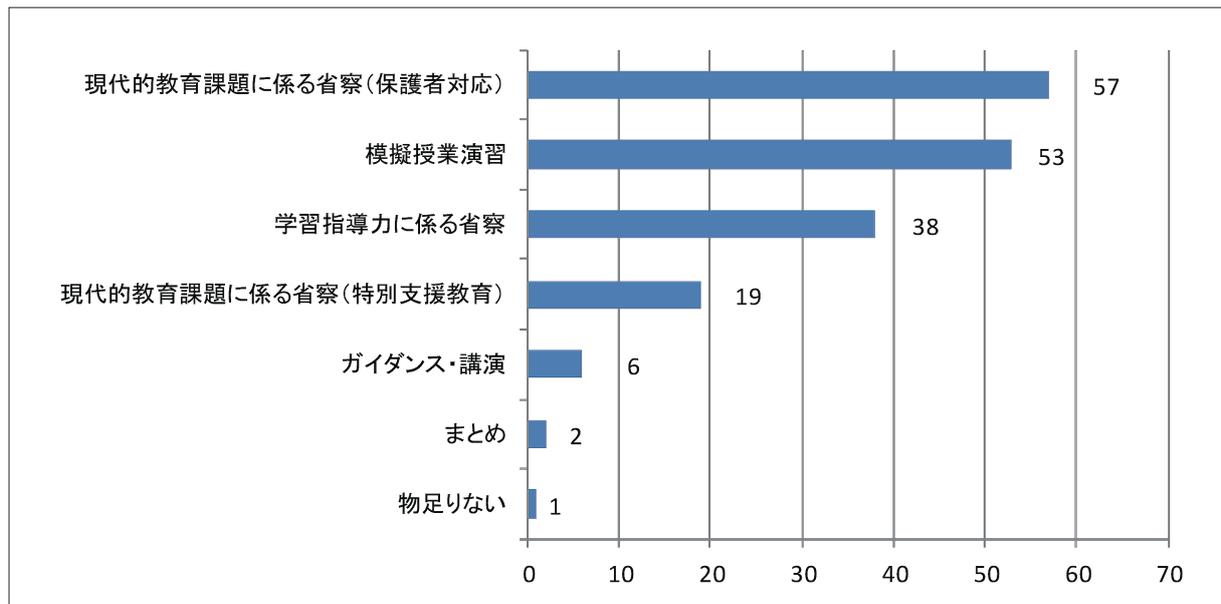


図 1 授業内容のうち充実していたもの（単位：人）

※上記 7 つの項目から選択（複数選択可）させた。なお、有効回答は 93 名であった。

と回答している学生も多く、この点に関して学生が困難を感じていることが示唆された。このうち、“卒業研究や就職活動との両立”に関しては、本年度の初回の授業日（ガイダンス・講演）が企業の内定式と重なり授業に参加できず、補講で対応する学生が

複数名いたことも関係していると考えられる。課題を求めることへの困難さの結果も踏まえて考えると、卒業研究や就職活動と教職実践演習を両立させることに一定の負荷がかかっていることが推察される。しかし、企業の内定式との重なりは不可抗力の部分

もあり、毎年必ず重なるというものでもないと考えられるため、結果を多少割り引いて考える必要があるだろう。

また、“教職担当教員と教科担当教員が合同で授業を実施すること”についての満足度がやや低かった。本実践演習では、教職担当教員と教科担当教員の合同の授業にしているが、基本的に複数回担当する教職担当教員に比べ、教科担当教員はほとんどが1回のみ担当である。学生によっては、担当教員が毎回変わることに戸惑った学生もいたかもしれない。また、教科担当教員の中にはごく少数であるが、担当授業にフルに参加できなかったケースもあり、残念に感じる学生が一定数いた可能性は否めない。教科担当教員と教職担当教員の連携をより深めていく事が課題の一つであるだろう。

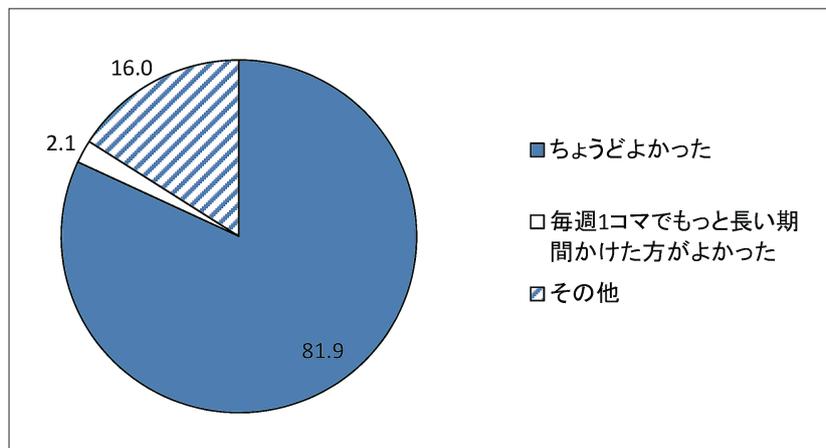


図2 隔週2コマ連続で四半期で終わる形態はどうであったか

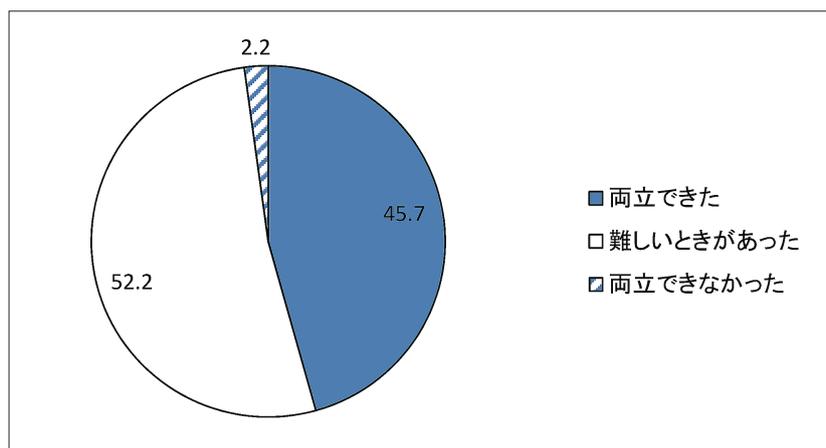


図3 卒業研究や就職活動と両立できたか

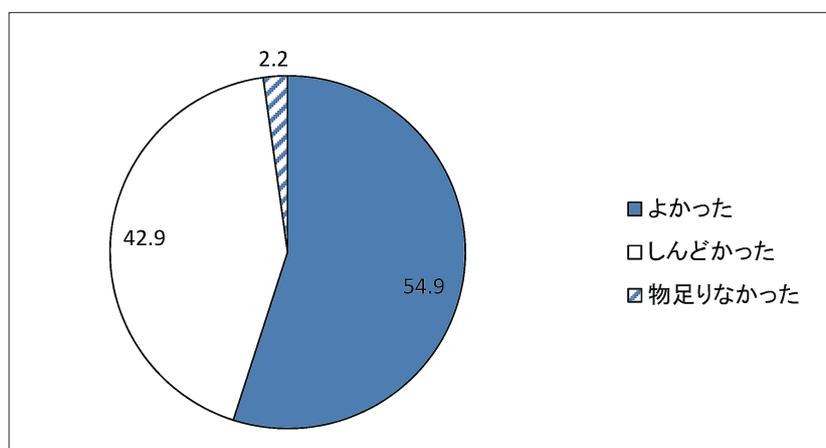


図4 次時までの課題（宿題）を求めることもあったが、どうだったか

3 教育実践力を構成する4つの力に対する自己評価について

教育実践力を構成する4つの力が教職実践演習を受講することによって高まったのかを検討するために、実践演習前のデータとして4年前期の教育実習後に実施した教育実習後の調査結果を用い、事前事後の比較による検討を行った（表1）。その結果、「学習指導力」の「子どものレイネスや学習状況を把握すること」 ($t(87)=3.79, p<.01$), 「学習指導要領や教育課程をふまえて、学習指導案を作成する

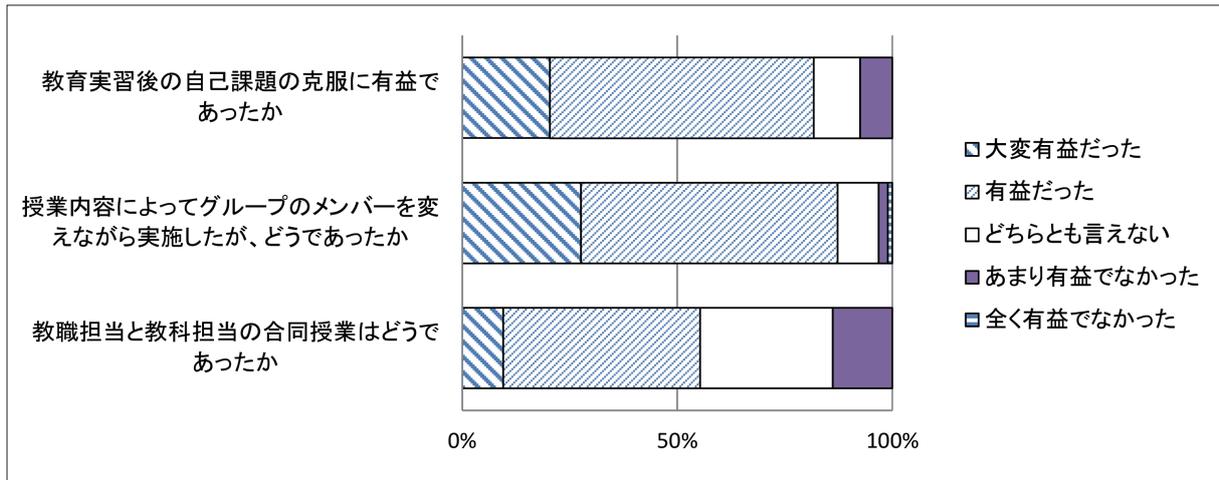


図5 学生の授業全体への満足度1

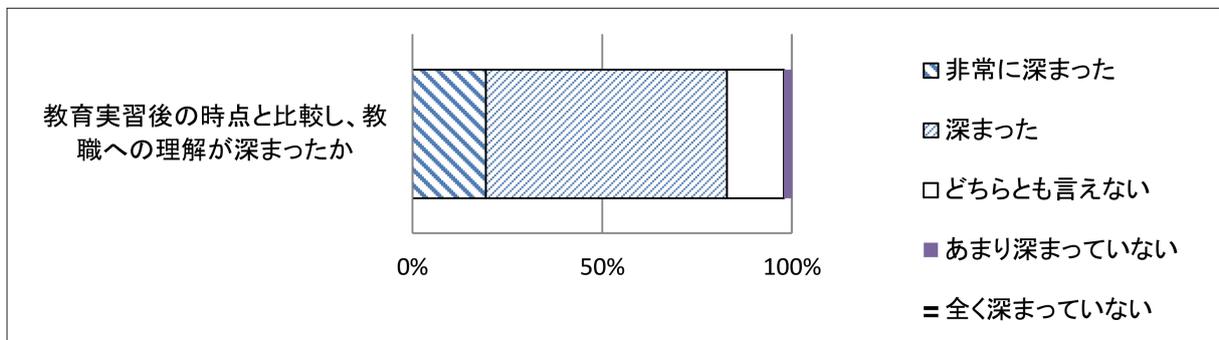


図6 学生の授業全体への満足度2

表1 教職実践演習の事前事後における学生の教育実践力の変容

	前	後	t値
【学習指導力】			
1.子どものレディネスや学習状況を把握すること	3.23	3.64	3.79 **
2.学習指導要領や教育課程をふまえて、学習指導案を作成すること	3.73	4.15	4.07 **
3.様々な指導法を活用して、子どもの学習状況に応じた授業を行うこと	3.44	3.74	2.88 **
4.自他の授業実践を分析し、授業の改善点を発見すること	3.99	4.12	1.38
【生徒指導力】			
5.子どもの発達的特徴を理解すること	3.08	3.53	4.39 **
6.子どもの生活の実態を理解すること	3.34	3.37	0.32
7.子どもと共感的にコミュニケーションすることや、子ども同士のコミュニケーションづくりを指導すること	3.57	3.72	1.31
8.子ども理解に基づき、学校や学級で子どもが楽しく生活できるよう指導すること	3.38	3.63	1.98
【コーディネート力】			
9.実習生同士で協働して学習指導や学級経営等に取り組むこと	3.80	4.03	1.96
10.実習校の教職員とコミュニケーションをとり、連携すること	4.10	4.06	0.42
11.学校に関わる協力者や専門機関と連携すること	2.61	3.00	3.15 **
12.保護者や地域の人とコミュニケーションをとり連携すること	2.18	3.13	7.99 **
【マネジメント力】			
13.自分で自分を律しつつ、意欲と課題意識をもって教育実践に取り組むこと	3.85	4.13	3.16 **
14.教員の使命や職務について理解し、専門職として求められる資質・能力等を高めていくこと	3.72	3.94	2.23 *
15.学級・学年目標の実現に向けて、子どもの集団に働きかけること	3.27	3.59	2.55 *
16.学校教育目標の達成に向けて、学校組織の活動内容や運営について理解すること	3.46	3.60	1.38

※前…教育実習後、後…実践演習終了時、を指す。

※ ** $p < .01$, * $p < .05$

こと」($t(88)=4.07, p<.01$), 「様々な指導法を活用して、子どもの学習状況に応じた授業を行うこと」($t(88)=2.88, p<.01$), の3項目に有意差が見られ、有意に得点が上昇していた。

次に、「生徒指導力」の「子どもの発達の特徴を理解すること」($t(88)=4.39, p<.01$)において有意差が見られ、有意に得点が上昇していた。

また、「コーディネート力」の「学校に関わる協力者や専門機関と連携すること」($t(87)=3.15, p<.01$), 「保護者や地域の人とコミュニケーションをとり連携すること」($t(88)=7.99, p<.01$), の2項目に有意差が見られ、有意に得点が上昇していた。

最後に、「マネジメント力」の「自分で自分を律しつつ、意欲と課題意識をもって教育実践に取り組むこと」($t(88)=3.16, p<.01$), 「教員の使命や職務について理解し、専門職として求められる資質・能力等を高めていくこと」($t(88)=2.23, p<.05$), 「学級・学年目標の実現に向けて、子どもの集団に働きかけること」($t(87)=2.55, p<.05$), の3項目に有意差が見られ、有意に得点が上昇していた。

以上のように4つの力16項目のうち多くの項目の得点が上昇しており、本学の実践演習の効果の大きさが窺える。このうち、特に2つの点に注目したい。まず、1点目は「学習指導力」に関する結果である。本学の実践演習においては、「学習指導力に係る省察」「模擬授業演習」と主に学習指導力の向上に特化した授業内容に多くの時間を割いている¹⁴。このように多くの時間を割いたことに対して学習指導力の4項目のうち3項目までもが高まったのは成果の一つと言えるだろう。2点目は、「コーディネート力」で上昇した2項目についてである。この2項目の事前データを見ると、共に得点が中央値である3を下回っていた。特に“保護者や地域の人とコミュニケーションをとり連携すること”に関しては限りなく2に近い得点であった。すなわち、身についているかどうかで考えると身についていないと学生が捉えていた項目と言える。さらに、他の項目や他の力の得点と比べても低い得点であることが窺える。この低かった、いわば全学教職課程履修学生の特に弱い部分に関して本実践演習を通して高めることができたのは大きな成果と言えるだろう。これは、本実践演習の現代的教育課題において保護者対応や特別支援教育を扱った成果だと考えられる。特に保護者対応に関しては、先述した授業内容への満足度について1番満足度が高かったことを踏まえるとこの結果もうなずける。そ

他の上昇した項目についても本実践演習の成果によるものが大きいのではないかと推察される。

IV まとめと今後の課題

本研究では、教職実践演習が本格実施された1年目の受講生を対象にした調査から本学の全学教職実践演習の成果と課題を検討することが目的であった。以下に結果を要約し、まとめとしたい。

まず、学生が満足している授業内容では、現代的教育課題に係る省察(保護者対応)、模擬授業演習、が上位に該当しており、こういった内容の学びを学生が特に必要としている可能性が示唆された。

次に、授業全体、実施形態等への満足度について見ていくと、全体的な満足度や実施形態への満足度は概ね高いと考えられるが、卒業研究や就職活動との両立や求められる課題の大変さ、教科担当教員と教職担当教員との合同授業の意義の感じづらさ、といった課題も見出された。

最後に、教育実践力を構成する4つの力に関する自己評価を見ていくと、多くの設問の得点が有意に高まっており、「学習指導力」に関する効果の高さや事前の段階で特に得点が低かった「コーディネート力」の2項目への効果の高さが示唆された。

以上の結果は、本学の全学教職課程履修学生対象の教職実践演習の一定の成果を実証的に示したものであると考えられる。特に教育実践力を構成する4つの力に関しては、事前事後の変容データでもって効果を示せたことに大きな意義があると考えられる。樫田他(2014)において、教育実習後と比較した際の学生の成長への疑問や非教職志望学生を一定数含んだ時の成果の低下への危惧が挙げられていた。本研究の結果はそうした学生への成果の疑問に応え、また、必修に伴う成果の低下をある程度防ぐことができたことを示しており、本学の全学教職実践演習が順調なスタートをきれたことを表していると考えられる。

もちろん、アンケート結果に見られた教職担当教員と教科担当教員の合同授業に対する意義についての結果などは課題として受け止め、一層教員間の意思疎通並びに連携を深めていく必要があるだろう。それと共に、何を教えるのか、どんな内容の議論をさせるのか、といったことも引き続き検討していく事が重要であろう。いずれにせよ、教職実践演習は1年目を終えたのみである。引き続きデータと実践を蓄積していく事が必要であろう。

注

1. ここで示しているのは、本研究で分析対象としたもののみである。
2. ただし、本学の全学教職実践演習は、どの講においても 4 つの力について複合的に発揮しなければならない内容にしていることから、学習指導力に係る省察及び模擬授業演習を通して、学習指導力の向上をメインに考えながらも、その他の力も向上させることを企図している。

引用文献

中央教育審議会 (2006). 教職実践演習 (仮称) について 今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申) < http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm > (2014 年 12 月 22 日)

姫野完治・石橋研一・神居 隆・斎藤 孝 (2011). 教職実践演習のカリキュラム開発と試行 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 33, 123 - 132.

樫田健志・高旗浩志・江木英二・曾田佳代子・三島知剛・

後藤大輔・加賀 勝 (2013). 全学教職課程における「教職実践演習に向けての取組」—教科専門科目担当教員の意識に着目して— 岡山大学教師教育開発センター紀要, 3, 171 - 178.

樫田健志・高旗浩志・三島知剛・江木英二・曾田佳代子・後藤大輔・佐藤大介・山根文男・加賀 勝 (2014). 全学教職課程における「教職実践演習への取組」(2) —試行の成果と課題及び本格実施の実際— 岡山大学教師教育開発センター紀要, 4, 123-132.

佐瀬一生 (2013). 「教職実践演習」の施行に向けた試行的実践 (2) 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 283 - 297.

下田照雄・豊田昌史 (2013). 学生同士による「教育実習 (事後指導)」を目指した工学部における「教職実践演習」 玉川大学教師教育リサーチセンター年報, 4, 131 - 140.

田宮弘宣・下野浩二 (2008). 教育学部以外の学生を対象とした「教職実践演習 (仮称)」の試行—卒業後のアンケートから見えること— 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 18, 209 - 219.

Practical Seminar for Teacher Profession on the Teacher Training Program at Okayama University (3)

Based on the Questionnaire Survey to Participants of the Practical Seminar for Teacher Profession in 2013

Tomotaka MISHIMA^{*1}, Tsuyoshi KASHIDA^{*2}, Hiroshi TAKAHATA^{*1}, Shuuichi INADA^{*1},
Daisuke GOTO^{*1}, Eiji EGI^{*1}, Kayoko SODA^{*1}, Fumio YAMANE^{*1}, Masaru KAGA^{*1*3},
Shigenobu TAKATSUKA^{*1*3}

Keywords: Practical Seminar for Teacher Profession, Practical Teaching Skills, Consciousness of Students

※ 1 Center for Teacher Education and Development, Okayama University

※ 2 Kurashiki Educational Center

※ 3 Graduate School of Education, Okayama University
